

春の散歩道の傍らで

(石橋正彦)

コロナ禍で外出自粛の日々、運動不足にならないために出来るだけ散歩に出ています。幸い近くに県立座間谷戸山公園、大和市立泉の森公園など散歩に適した公園があり、春にはいろいろな花が咲きます。散歩に出た際にスマホで撮った写真の中から幾つか紹介しながら、春の草花などを徒然なるままに楽しむことにしましょう。



(カタクリ)

初春の花と言えばまずカタクリ。可愛いユリ科の植物。昔は根から澱粉を採って食用、薬用にしたそうですが、今は都市部ではほとんど見る事が出来ないくらい、それこそ絶滅に瀕している花です。日本でカタクリと言えばまずこの写真のように薄紫色の花を思い浮かべるのですが、以前カナダのトロントに5月に行った際に見たカタクリはすべて黄色でした。カタクリはカナダでは春に雪が消えると Triforium (和名エンレイソウ 延齡草 カナダオンタリオ州の州花) と共に真っ先に見られる花で、葉が Broun trout の模様に似ているから現地では Trout lily と呼ばれています。カタクリの英語名は Dogtooth violet というのもありますが、これは球根が犬の歯のように見えることから来る由。ユリ科なので Trout lilyの方がふさわしいと思います。わが国でも黄色、白のカタクリの花があるそうですが、早春のカタクリの花はやはり薄紫が良いですね。



(ニリンソウ)

ニリンソウは花が咲くころには葉が見えるのですが、花が終わるといつの間にか葉も消えてしまい、翌年春まで他の草に隠れて地中でひっそりと過ごしているようです。面白いことにイチリンソウ、サンリンソウもあるので、もっとよく探せばイチリンソウ、ニリンソウ、サンリンソウと比較して楽しめるかもしれません。葉の形は一年中その辺でよく見かけるフウロソウ科のゲンノショウコに似ているのですが、ニリンソウはキンポウゲ科。やはり春先に楽しめる可愛い花です。



(キブシ)

春先に葉が出る前に、芸妓が付けるかんざしのように花がぶら下がります。日本固有種なので、英語でも Kibushi です。5月頃になると雌株には実がなるのですが、びっしり花が咲いていたのに、実はまばらです。漢字ではキブシは木五倍子と書きますが、これは実にタンニンを含み、黒色染料に使うことから来る由。



(サンシュユの木)

(サンシュユの花)

春先に真っ先に咲く公園花。花の名前は漢名の山茱萸の音読みの由。中国原産、ミズキ科で和名はハルコガネバナ 春黄金花だとか。遠くから見ても、あ、サンシュユだ、とわかる季節の花。細かい花が集まって咲いています。秋になる実（シュユ 茱萸）はグミのことで、グミに似た赤い実がなり、熟した実から種を抜き、乾燥させたものが薬用に供されるそうです。“庭のさんしゅうの木 鳴る鈴かけて ヨーホイ 鈴の鳴るときゃ 出ておじゃれヨ”と宮崎県椎葉村の稗付き節に歌われるのは、その辺にサンシュユがないのでサンショウ（山椒）のことではないかとか。どちらでも良いですが。



(ムサシアブミの葉)

(ムサシアブミの花)

サトイモの仲間。葉は一對の3枚の小葉が大きく輝くように付いて、その茎の間にボクシングのグローブのようなテンナンショウ（天南星）族特有の仏炎苞が出ます。小葉は大きい場合は30 cmにもなります。仏炎苞は濃緑色からほとんど白い淡緑色ものまであります。苞の先（舷部）は袋状に巻き込んでおり、苞の下部は黒ずんだ濃紫色で不気味な感じがします。花（肉穂花序）は外からはほとんど見えません。秋には他のテンナンショウ同様トウモロコシみたいな実の軸（コブ）に赤い実をつけるようですが、花も実も有毒です。もっとも、球根をじっくり蒸し焼きにすると食べられるとのことですが、まだ食べたことはありません。この仏炎苞を見て昔の馬具の鏡（アブミ）を逆さにした、と命名した方の発想に敬服。名前の武蔵から関東全般に見られるような印象を受けますが、あまり見かけない草のようです。でもなぜか座間谷戸山公園には沢山生えています。



(ハナイカダ)

花筏という桜の満開期を過ぎた頃に水辺一面にびっしりと花びらが敷き詰められたようになるのを想像しますが、もう一つハナイカダという葉の葉脈に直接花をつける木があります。葉と同様緑色をした花なのであまり目立たないですが、ひっそりと愛らしく咲いています。雌株の花は1-2輪だけ、雄株の花は5-6個付いているようです。谷戸山公園には雌株が数本ありますが、雄株は見当たらないようです。この花は5月頃になると団子状の実になって、やがて実（液果）は黒くなり、食べると甘いそうです。また若葉は天ぷらや菜飯で美味しいそうですが、公園の中に数本ささやかに生えているだけなので、試食は難しいです。別名はヨメノナミダというそうですが、なぜでしょうか。



(オトシブミ)



(気にぶら下がっている落とし文)

オトシブミという甲虫の揺籃です。オトシブミはクリ、ナラ、クヌギなどのいわゆる雑木林を構成する木、あるいはバラの木などに普通に作るようですが、そろそろ初夏という時期に良く地面に白い花を落としているエゴノキ（エゴの花 道白くして 夏近し）でよく見られます。これはエゴツルクビオトシブミが作った自然からのラブレター。最初右の写真のように枝にぶら下がるように付いていますが、やがて落ちて、道端で散見されます。置いてある1円玉で分かるように大体2cmくらい。他の木の下で見られるものでは3cm近い大きさのものもありました。これは葉に噛み傷を付けて葉をくるくると巻き込み、中に1個卵を産み付け、このようなきれいな形に作り上げるのですが、何とも芸術的。幼虫は親が巻いてくれた葉を食べて成虫となり越冬します。エゴノキに付くエゴツルクビオトシブミの成虫の雄は頭胸部が細くて長いので鶴首だそうです。成虫が揺籃を作るところを観察したいのですが、公園のエゴノキは皆大きくて枝が高くにあるので、まだ成虫を見つけたことはありません。